

2025年6月8日 聖霊降臨日(ペンテコステ礼拝 聖霊降臨節 第1主日 週報番号3467号)

説教題：「秘められた計画の実現」

聖書箇所：エフェソの信徒への手紙3章1-13節 (354頁)

説教者：秀島行雄牧師 招詞：讚美歌93-1-52 交読詩編：詩編116編1-7節 (128頁)

讚美歌：83/339 (来たれ聖霊よ) /343 (聖霊よ、降りて) /521 (とらえたまえ、われらを) /27

「今週の聖句」〔すべてのものをお造りになった神の内に世の初めから隠されていた秘められた計画が、どのように実現されるのかを、すべての人々に説き明かしています。〕 (エペソ書3:9)

「牧師室の窓」 「聖霊が降(くだ)るを祈る心より不確実なるこの世にあれば」

「この身にも聖霊降り新たな一歩を出でぬ主の愛受けて」

(1)皆様おはようございます。本日は聖霊降臨日(ペンテコステ)礼拝です。キリスト教の年間行事としては、春の復活日(イースター)礼拝、冬のクリスマス礼拝と共に、三大大行事・イベントの一つが今日(きょう)の聖霊降臨日(ペンテコステ)礼拝です。聖霊降臨日は、キリストの復活(イースター)から50日後です。

その時の様子が新約聖書の使徒言行録第2章に書かれています。ユダヤ教の最大の祭は過越しの祭であり、それは奴隷状態のイスラエル人がエジプトから脱出するきっかけとなった出来事を祝う祭りです。その過越しの祭から50日後に五旬祭があります。五旬とは10日間×5回=50日と言う計算です。

使徒言行録第2章には、この五旬祭の祭りの日のことが書かれています。大勢のユダヤ人と外国に住んでいてこのお祭りのために訪問したユダヤ人たちが見ている中で、異変が起きたのです。聖霊が弟子たちの上に降(くだ)り、弟子たちはさまざまな民族の言葉で(つまり、様々な外国語で)話し始めます。弟子たちの筆頭・チーフであるペトロは十字架の刑で処刑されたイエスが救い主・メシアであり、悔い改めの洗礼を受けて救われることを人々に語り掛けました。ペトロは人々に「(行伝2:40)邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めました。「邪悪なこの時代」とはいつのことでしょうか。いつの時代にも人々は苦しみの中、悩みの中にいます。ですから、聖書の御言葉はいつの時代にも神の言葉の福音を知らせています。私たちの今の時代も、生きることが苦しく、精神も虐げられています。神の言葉に耳を傾けて、自分自身を見詰めてみましょう。

(2)聖霊とは何でありましょうか。聖霊とは神から送られてくる助け主です。コリントの信徒への手紙Ⅱ13章13節には〔(コリント後書13:13) 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。〕と記されており、後に、父・子・聖霊の「三位一体」と言う考え方がここに見ることが出来ます。

「聖霊」とは、ヘブライ語(ヘブル語)では「ルアッハ」と言いまして、風、或(ある)いは、生命を与える神の息を意味しています。それがギリシア語では「プネウマ」と翻訳されました。聖霊は、生けるキリストを宣べ伝える教会を支える神の働きとして理解されました。クリスチャンではない人にとっては「聖霊」なんて馬鹿馬鹿しいと思われるかも知れません。ヘブル語の「ルアッハ」の意味は風や神の息と申し上げました。

先週6月2日(月)の朝日新聞朝刊の読者からの投書欄「声」に興味深い、心が打たれる文章が載っていました。題名は「風は見える？いつか思い出して」(会社員 和田 岳さん36歳)その前半部分を読んでもみます。「3年前の5月末に、幼い息子と娘から「風は目で見えるの？」と聞かれた。素朴な質問だが、いい加減に答えたくなくて、じっくり考えた。／いつか見た林の光景が頭に浮かんだ。風が吹く方向に合わせて一斉に木が揺れ、深緑色の葉がカサカサと力強く葉擦れの音を立てる。そうだ、これが「目に見える風だ。」／子どもたちを散歩に連れ出し、公園で風に揺れる木々を見せて

言った。「揺れている木、葉擦れの音。風は見えるし、聞くこともできる。けど、いつも同じではないよ。」…」

目には見えない風を感じる体験を次の世代へ伝えようとしています。目には見えないエネルギーを感じて、それを伝えることは馬鹿々々しいことではありません。人間の心を豊かにし、次の世代へと繋(つな)ぐ役割と使命とがあるのです。

(3) エフェソ書の特徴は、ユダヤ人以外の外国人(つまり、異邦人)への伝道マニュアルであります。何故ならば、エフェソの町はローマ帝国時代の大都市の一つであり、当時の世界七不思議に数えられていたアルテミス女神神殿があり、異教の人々が住む町で、パウロたちのチームによるイエス・キリストの救いが伝道されていたのです。

今日の聖書箇所は、エフェソの信徒への手紙第3章1節～13節です。この箇所には同じ言葉が何回も出てきます。その1つが「異邦人」であり「計画」です。聖書を読む時も、何かの本を読む時もそうですが、繰り返し出てくる言葉には、要注意です。私には毎回新鮮な思いで聖書を読む秘訣があります。それは、繰り返し出てくる言葉を発見することです。信徒時代には牧師の説教内容をメモして(1行でも2行でも10行でもメモをして)通勤の電車の中で繰り返し読み、暗記するまで読みました。すると文字が頭の中で地図となり立体化して来るのです。先月5月の東京教区定期総会でも開会礼拝での説教をメモして、帰りの電車の中で繰り返し読みました。メモに書くと言うことは、耳で聞き、頭で考え、指で書き、目で確認し、声で黙読することになります。耳で聞くだけでは、その時間を、その空間を過ごすには勿体ないと思います。以前にも申し上げましたが、サービスの本質は何か(礼拝も英語ではサービスと言います。サービスの本質は)聞いた瞬間に、見た瞬間に消えてしまうことです。消えてしまう言語や動作をどの様に記憶するのがその人には「見えない資産・無形資産」となることでしょう。

(4) まずは今日の聖書に書かれている「計画」と言う文字です。3節には「秘められた計画が啓示によってわたしに知らされました」、4節には「キリストによって実現されるこの計画」、9節にも「神の内に世の初めから隠されていた秘められた計画」と書かれています。「計画」はギリシア語ではミステリーオンです。英語ではミステリーと訳されています。口語訳聖書では「奥義」(学芸や芸術などの最も重要な事柄)と翻訳されており、聖書協会共同訳では「秘義」(奥深い教え)と翻訳されています。「ミステリーオン」が3節では「啓示によって…知らされ」、4節では「キリストによって実現される」、9節では「実現される」のですから、「計画」と言う翻訳が分かり易いと私は思いますが、皆様は如何でしょうか。思案して頂くことが大切です。では、「計画」とはどのようなものなのでしょうか。それを探求するのは旧約聖書を読むことです。私たちの南板橋教会では毎月1回、年間でも11回の「交わり礼拝」で旧約聖書創世記から毎回1章を読んでいます。前回までで、282章を読んでいます。「交わり礼拝」は「秘められた計画」を尋ねる旅行、銀河鉄道の旅でもあるのです。他の教会では殆ど行なわれないことがない、恵まれた礼拝、恵まれた教会と言えるでしょう。旧約聖書には、神の思いから離れていく人間の姿が、読むに耐えない人間の傲慢さや惨めさが書き記されています。とても聖書とは言えないようなことも書かれています。その様な人間の姿や行動に対しても神の呼び掛けがあり、救いの手が向けられているのです。3節に書かれている神の「秘められた計画」が、4節に記されている様に「キリストによって実現されるこの計画」として実現する場所、即ち、実現する舞台こそが異邦人が住むこの町・エフェソの町なのです。エフェソの町とは、現代に生きる私たちの町、或(ある)いは、私たちの人生と言い換えることが出来るでしょう。そのことが6節には「すなわち」とスタートして書かれています。〔(3:6) すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです。〕この6節は一言で言えば、神の約束は、

異邦人とユダヤ人とが共に、一緒に受継ぐと書かれています。今までは、神の約束を受継ぐのはユダヤ人のみであり、異邦人は除外されていると考えられていました。言葉を変えて言えば、神の救いには異邦人は「引き算」の対象であるとされてきました。併し、この6節が言っていることは、即ち、ユダヤ人も異邦人にも区別も違い(差異)もないということです。同列であり、両者が一緒になって、「足し算」になって神の恵みを受けるのです。「引き算」の対象から「足し算」の対象となるのです。

(5)ここで頭の切り替え、頭の体操をしてみましょう。「お釣りの計算」です。皆様も良く慣れています。例えば、750円の買い物をするのに1,000円札で支払いをすると、お釣りは皆様の頭の中では、 $1,000円 - 750円 = 250円$ と直ちに「引き算」の計算をされるでしょう。

計算式は、江戸時代までは縦書きに記述されていました。ところが、ヨーロッパでは「お釣りの計算」は「足し算」をして結果的に「引き算」の計算するのです。これを「加算的減算（或いは、加法的減法）」と言います。ヨーロッパ旅行で買い物をするとお店の店員がこの不思議な計算をしていることに驚くでしょう。分かり易く言いますと、品物の値段750円に何円を足し算すると、お客の出した1,000円になるのか、750円に50円を足し、200円を足せば、つまり、250円を足せば1,000円になるのです。これを計算式で書くと、 $1,000円 = 750円 + 250円$ と言う計算式になるのです。西洋の文章は横書きですから、左辺の1,000と、右辺の $750 + 250$ とが「=（イコール）」になる、「バランス」しているのは一目瞭然です。この考え方は「簿記」に應用されて、「簿記」は西洋で発展しました。日本での縦書きの「大福帳」では、「加算的減算」の考え方も「簿記」も生まれませんでした。日本では「引き算」の思想だけが引き継がれていきました。現代社会でも、人々の考え方は「引き算」の思想が支配しています。日本基督教団にも東京教区にも北支区にもその影響がないとは言えません。私が神学校で学んでいた時に、私は神学校の先生に提案・提言しました。神学校で簿記3級を3時間だけでも学んではどうでしょうか。簿記の勘定科目を学べば社会の仕組みが分かり、貸借のバランス感覚を理解し、資格を取れば副業が出来て謝儀の不足を補い、近隣の人々との信頼関係に役立ちます。パウロだって副業をしていました。…併し、答えは「否(いな)」、もっと柔軟であればと思います。因みに、福澤諭吉が明治6年に簿記の教科書を翻訳しています。頭を柔らかくして考えなさいと教えているのです。

パウロが異邦人伝道と言う「足し算」の考え方を推進し、キリスト教は広い世界へと伝道されていきました。併し、日本の教会も、神学校も、私たちも、パウロの伝道推進力が何であるのかを見落とすてはいないでしょうか。私たちが今読み進めているエフェソの信徒への手紙を繰り返し、繰り返し読み、「秘められた計画」のミステリー・ミステリーにチャレンジする絶好の機会であると思います。13節には「苦難を見て、落胆しないでください。この苦難はあなたがたの栄光なのです。」とパウロは私たちに励ましています。今日(きょう)は聖霊降臨日礼拝です。聖霊が私たちに降り注ぎ、生きる勇気を与えてくださるのです。本日の聖書箇所第12節をもう一度読みますので。お聞き下さい。〔(3:12)わたしたちは主キリストに結ばれており、キリストに対する信仰により、確信をもって、大胆に神に近づくことができます。〕 そうです、わたしたちはキリストに結ばれて、キリストへの信仰により、心を開いて、思いっきり神に近づくことができるのです。一步を踏み出しましょう。

・・・お祈りします。

イエス・キリストの主なる神様。私たちは、本日、聖霊降臨日・ペンテコステを迎えました。ありがとうございます。神の恵みに感謝します。これからも信仰へと導いて下さいます様をお願いします。神が創造されましたこの地球上に生きる一人一人に平安・平和と希望が与えられますよ

うに。食べ物が乏しい人々に、災害や戦争の只中にある一人一人に慰めがありますように、お守りください。私たちに知恵と勇気をお与え下さい。

教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。 イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン